

ワールド  
トク  
RPG  
!

主な  
登場人物  
Main  
Characters

メテオ・  
ブランディッシュ

本編の主人公。伝説のパーティ  
シューティングスター  
「流れ星」のリーダーで、  
ウォルスタの魔術師ギルドの長。

石井先輩

テーブルトークRPGの  
ゲームマスター。  
事故で死んで  
しまったのだが……？

ハム

ウォルスタ自警団長。  
武器マニアな戦士。  
メテオの仲間。

メル

メテオの護衛を  
している戦士。  
無邪気な性格。

リーズン

ウォルスタの領主。エルフで  
精霊使い。メテオの仲間。

アーティア

ウォルスタの商業神神殿長。  
守銭奴。メテオの仲間。

エステル

メテオの弟子で魔術師。  
賢者レベルが高い。

# アーターレウRPG

キャラクター名

メテオ・ブランディッシュ

種族名

ヒューマン

性別

男

年齢

26 (16)

職業属性

魔法使い

LV スキル名

9	魔術師
3	賢者

経験点

79,510

所持金



キャラクターの肖像・特徴

重要なアイテム等

- ・無限の革袋
- ・魔術師の杖  
(魔法の発動体)
- ・リング  
(魔法の発動体)

…etc

STR  
12

DEX  
16

AGI  
14

INT  
18

VIT  
14

MND  
18

## プロローグ

テーブルトークRPGというものをご存知だろうか？

紙と鉛筆とダイス、気の合う仲間とゲームマスターという進行役、そしてルールブックさえあればできる、RPGの元祖みたいなものだ。

ルールに従った設定を決め、ダイスという「偶然発生装置」を使い、プレイヤーとゲームマスターがその偶然をまとも上げてひとつのシナリオを作る。

いつてしまえば、大人の『ごっこ遊び』である。

インターネットどころか、まともなTVゲームさえなかった時代に生まれ、コンピュータのゲームがどんどん豪華絢爛になるにつれ廃れていった感はあるものの、いまだにそのファンは多い。

都心のゲームショップなどに行くと、今でも有志によるゲームコンベンション開催のチラシが置いてある。

あまり表に出ないが、水面下でプレイし続けているテーブルトークRPGプレイヤーも多いことだろう。

そして俺、杉村前賢も、そのテーブルトークRPGのプレイヤーであった。自慢じゃないが、半端なプレイヤーではない。

高校時代にテーブルトークRPGのルールブックを持ってきた先輩ゲームマスターとともに、二十年間もやり込み続けてきた——古強者だ。

なに、それくらい珍しくないって？

俺だって二十年くらいの経験はあるぞ？

いやいや、俺たちのパーティは筋金入りだ。

高校時代は毎日のように集まって「セッション」をしていた。

その後、大学に入ったり、専門学校に通ったり、就職した仲間もいた。

それでも二十代の終わり頃まで、週に一〜二回はセッションを続けた。

さすがに三十代にもなると、仕事が忙しくなり結婚や出産といった人生のイベントが続き、なかなか集まることはできなかった。

だが根性で、月に一〜二回ほどのペースでセッションを続けてきた。

俺の知る限り、この歳までこのペースでテーブルトークRPGをプレイし続けてきた者はいない。下らないと思う者もいるだろう。

しかし、これは俺たちが築き上げた冒険の長さ。密かな誇りである。

とはいえ二十年の時間は、穏やかな湖面のように過ぎていったわけではない。

むしろ逆。激動の二十年だったといっている。

メインのメンバーはほぼ全員残っていたが、数回セッションしただけで去った者もいれば、仲違いで抜けていった者もいる。

年が近く、若い男女がひとつのテーブルを囲んでいるものだから、恋愛沙汰でセッション崩壊——といった危機もあった。

メンバーのひとは前に一児を出産したのだが、じつはセッション中に陣痛を迎えている。

そして、誰にも気が付かれることなく、セッションが終わるまで耐え続けた。

最後に経験点をキャラクターシートという冒険記録用紙に書き付け、

「やった！ レベルが上がったわ!!」

と叫ぶと同時に破水したのだ。

後に、俺たちと旦那さんにしこたま叱られたのだが、そのときの子供もすくすくと大きくなり、今ではテーブルトークRPG業界の中でもちよつとした語り草になっている。

そしてゲームマスターはゲームマスターで、ゲームのために仕事を決めたようなものだった。

「俺は安定して土日祝にゲームがしたいから公務員になった」

と、公言して実際に役所勤めとなったのだ。

本人が語ることはなかったが、大学在学中から多くの有名ゲームデザイナー集団やゲーム制作会社に声をかけられていたらしい。

それらを惜しいとも思わず、彼は俺たちとゲームをすることを選んだ。

他のメンバーも程度の差こそあれ、似たようなものだったはずだ。

幾多の荒波に揉まれて残った七人のパーティメンバー。

いや、ひとりはゲームマスター役なので、実際のパーティとしては六人だ。しかし二十年もの間、

個性的なメンバーたちをまとめ上げ、飽きもさせずにセッションを続けた敬愛するゲームマスターを仲間はずれになどできやしない。

あえていおう。

この七人は最高のパーティーメンバーであったと。

つい、一週間前までは。

ゲームマスターである石井先輩が、交通事故で亡くなった。

俺は今、自室の机の前にいる。

机には、俺のキャラクターシートとふたつの六面ダイス。

キャラクターシートとは、テーブルトークRPGで使用するキャラクターの情報を書いた紙だ。

通常、キャラクターシートの記入には鉛筆やシャープペンを使う。VIT（体力）とMND（精神力）の消費や回復といった数値の変動、アイテムの増減はそのつど消しゴムで消し、書き込まないといけない。

故にすぐ、シートはボロボロになってしまふ。

このシートだって、もう何枚目かわからない。

ボロくなるたびに新しく書き換えるからだ。

古くなったキャラクターシートから真新しいキャラクターシートにデータを書き写す。

これがなんとも楽しい。

キャラクターシートが新しくなると、今まで雑多に記入していたアイテム欄などもすっきりするし、おまけに、書くスペースが増えてちよつと嬉しい。

だが、古いキャラクターシートも愛着があつて結局捨てられない。

そんなセッションの思い出が、俺の心をよぎる。

二度と戻らぬあの時間が、そのまま万力のように心を締め付ける。

石井先輩は高校時代、俺をテーブルトークに誘ってくれた人で、ひとつ上の学年だった。学校を卒業した後も、俺はしつこく「センパイ」と呼んだ。

石井先輩も嫌がるふうではなかったので、二十年近くもその呼称を使い続けた。

俺は自分のキャラクターシートを眺める。

〔名前〕メテオ・ブランディッシュ

〔性別〕男

〔年齢〕26（16）歳

〔種族〕人間

■パラメーター■

STR 12

DEX || 16  
AGI || 14  
INT || 18  
VIT || 14  
MND || 18

■スキル■  
魔術師 Lv 9  
賢者 Lv 3

『アーターレウ』と名付けられたそのゲームは、当時大ブームだったテーブルトークRPGシステムで、今でも続編が作られ続けている。

すでにバージョン3くらいまであり、初代システムは時代遅れといえなくもない。

しかし俺たちは、初代『アーターレウ』のシステムを二十年間やりこみ続けてきた。

もちろん、たまには違うシステムをプレイしたこともある。

だが、結局『アーターレウ』の世界に戻ってきてしまった。

「やはりというか、このメンツが初めて全員揃ったゲームだからか、思い入れが違うな」

と、石井先輩はよく頷いていたものだ。

『アーターレウ』は、極めて平凡で汎用性の高いゲームシステムが売りだった。

スキルは10レベルでカンスト。

つまり、俺はあと1レベルでカウンターストップ。

『アーターレウ』世界における最高レベルのスキルマスターになるはずだった。

「ついに俺は『隕石落とし』を使うことができなかつたよ。……センパイ」

『隕石落とし』は、魔術師10レベルの者が使える最高位魔法のひとつで、目標に対して小さいながらも隕石を落とすという強力な超広範囲攻撃魔法だ。

俺は、この魔法を自力で使うことを夢見て『アーターレウ』をプレイしていたといっても過言ではない。

その決意は、キャラクター名を見ても明らかだ。

ちなみに、魔術師レベル10になるには、とんでもない経験点が必要となる。

どれくらい必要なのかといえば、魔術師1レベルから9レベルの間に必要となったすべての経験

点の合計を上回るほどだ。

魔術師は、戦士や盗賊スキルが10レベルとなる段階でやっと8レベルというくらいに成長が遅い。

『アーターレウ』の世界では、もともち成長するのが遅いスキルだ。

「あと一回ぶんの冒険で、レベルが上がるはずだったんだ……」

俺は、キャラクターシートのわきにある、ふたつの六面ダイスを眺めながら呟く。



このダイスは、石井先輩がマスターのときに使っていたもの。

そう、『遺品』というやつだ。

石井先輩のご両親から形見分けでいただいたものだ。

「糞ッ!!」

耐えきれず両の拳で机を叩く。

「糞ッ!! なんて……!! どうして死んじまったんだ、センパイ!! どうして俺を……俺たちを置いて勝手に死にやがった!! 俺はどうするんだ!! メテオはどうすんだ!! 他のメンバーたちだって……みんなだつて……!!」

二度三度机を叩くも、気持ちはおさまらない。

おさまるはずがない。

「あんたはあの世界の神様みたいなもんだろ!! 神様が死んでどうするんだよ!!!? 残ったメテオたちはどうすんだ!? 無責任だろ……どうせ死ぬなら、責任持ってこの世界にけじめをつけてから死んだつていいじゃねえか!! 何で俺たちを置いて勝手に……突然くたばってるんだよ……!!!!!!!!!!」

あとから思えばひどい言い草だが、このときの俺は冷静ではなかった。

人生の半分以上、仮想現実とはいえ生死をともにして、冒険を繰り返してきた仲間だ。

身近な人間の死のつらさを、もつとも身近な人間が死ぬことで初めて体験させられた。

やや歪んだ発露であったとは思いますが、嘘偽りのない言葉だった。

「……また、一緒に冒険しましょうよ……センパイ……」

俺は力なく机に突っ伏す。

肘がダイスを弾き、ころころと床に落ちる。

出目は六・六。

ゾロ目だ。

突如、俺の意識は暗転した。

## 1 オーバーレベルアップ

夢から覚めたような自然さで、俺はそこにいた。

文豪が使っているような、かなり上質で重厚な木製の机の前に座っていた。

おかしい。さつきまで俺は、PCが置いてある、スチール製のどこにでもある作業机に座っていたはずだ。

机の上には、鶯ペンとインクの壺、羊皮紙に書物の類。

(中世か!!)

と心の中でツッコミを入れる。

それくらいの余裕はあるようだ。

じつと手を見る。

うむ、白魚しろうなほのような美しい手……

「……って、オイ！！！！」

今度のツツコミは、俺の人生でもっとも鋭い「ひとりノリツツコミ」であるのは間違いない。

「この姿はもしかして……」

ぐらりと目眩めまいがした。

(ありえない)

我が身の置かれた状況を客観的に眺めてみよう。

ここは部屋だ。えらく中世風だが、かなり上等なタイプの部屋で、俺は今そこにいる。

置いてある調度品など見たこともないものばかりのはず……だが、どういうわけか俺はこの部屋を知っている。

見たことはないが、すべての調度品が俺の心に、

(ここはお前の執務室だ)

と語りかけてくる。

(……ああ、そうだ。ここは俺の執務室だ。忘れるわけがない)

忘れるものか。ここは、俺たちのパーティが作った町、俺が作った魔術師ギルド、そのギルド内にある、俺専用の執務室……

「俺はメテオになったのか」

声に出した答えは、それが当然といわんばかりの自然さで、ストーンと心のどこかに落ち着いた。

「……まず、状況を整理しよう」

今まで座ったことがないはずだが、妙に使い慣れた執務室のイスに座り直す。

「リアルな夢という可能性も、なくはないし……」

そう考えると、がぜん気が楽になった。

そうだ、これは夢に違いない。すべすべの高級な手触りの肘掛けがかつてない存在感で「欺瞞ぎまんだ、現実を見る」といつている気がしなくもないが、ひとまずこれは夢ということにしよう。

「そーいや俺、あともうちょっとでレベル10になれたんだよな」

自分がテーブルトークRPGのキャラクターであるメテオだと仮定した場合、当然気にかかるのは現在のパラメーターだ。

(キャラクターシートとかないだろうし、どう確認するんだ)

心でそう思った瞬間、目の前に使い慣れたキャラクターシートと、俺が記入に使っていたシャーペン——しっかり0・4ミリ芯タイプ(俺は、0・4ミリ芯の2Bがもつともキャラクターシートに記入しやすい、と確信している)が現れた。

「ずいぶん至れり尽くせりな夢だな」

突如目の前に現れた見慣れたキャラクターシート。俺の記憶と寸分たがわぬ……そう、右端の茶色いシミは、俺がセッション中に助六すけむすくを食べていて、うっかり醬油しょうゆをこぼしたときのシミ。





いや、そんなことはどうでもいいんだ。

見慣れたキャラクターシートには、ひとつだけ大きく違う点があった。

『経験点』5104560点』

「……いちじゅうひゃくせんまんじゅうまんひゃつ……百万!？」

なんだこの経験点。

「『アヤータレウ』の常識を超えたケタ数だぞ……」

『アヤータレウ』のシステムにおいて、この数値は異常だ。もつとも上がりにくいスキルである魔術師がレベル9から10に上がるときの必要経験点ですら8万点だ。

「おいおい。夢だからって、経験点の大盤振る舞いにもほどがあるぜ……」

俺はちよつぷり涙目になった。

『アヤータレウ』のシステムでは、セッション終了時にマスターが成果に応じて経験点をプレイヤーに与える。

一般的には、一回冒険を終える——例えばゴブリン退治したら、パーティ全員に1000点の経験点を与える、といった感じだ。

だが、石井先輩はこと経験点の与え方については渋かった。その渋さは常軌を逸していたといつても過言ではない。

「よし、今日のセッションでは、きみたちはあわや世界が破滅するところを回避した。よって本日経験点は大サービスで、ひとり750点を受け取りたまえ!!」

どんなに成功した冒険でも、一回のセッションで与える経験点が1000点を超えることは絶対になかった。初めのころ、メンバーたちはそれについて毎度異議申し立てをしたものだが、先輩がそのスタンスを崩すことはついに一度もなかった。

思えば、二十年もの長きにわたって同じパーティで冒険をしてこられたのも、石井先輩が限界まで経験点報酬を削ったおかげかもしれない。

俺たちも三十代になるころには、安易な成長よりも、パーティメンバーが集まって冒険をすることに重きを置いたロールプレイをしていた。

魔術師よりも成長が早いスキルである、俺以外のメンバーは、主要スキルをほぼカンストして、俺が10レベルの魔術師になるのを待っていた感すらある。

「大奮発だな、こりゃあ」

絹のような肌触りのローブの袖口で涙をぬぐう。そして持ち慣れたシャーペンと、やはりよく使ったカドがいつばいある消しゴムを、手元に寄せた。

(よし、だったらお言葉に甘えさせてもらおうぞ)

---

〔名前〕メテオ・ブランディッシュ

〔性別〕男

〔年齢〕26(16)歳

〔種族〕人間

〔職業属性〕魔法使い

■パラメーター■

STR || 12

DEX || 16

AGI || 14

INT || 18

VIT || 14

MND || 18

■スキル■

魔術師 Lv 9

賢者 Lv 3

---

これが俺のパラメーターとスキルだ。

年齢の26(16)歳というのは、セッション内で身体が若返り、成長が止まってしまふ事件があったからだ。現実の俺は三十六歳だが『アヤタレウ』の俺は二十六歳、しかし肉体年齢は十六

歳となっている。

俺がメテオ・ブランディッシュを使い始めたのが、まさに十六歳。この若さの肉体で、今この世界に居るのは、なんとも奇妙な話だ。

『アータレウ』では、10レベルがいちおうのコンストとなっているが、別売りの追加製品で『オーバーレベル』ができるサポートも出る予定だった。ただ、予定はあったがサプリメントが出版されることはなく、次のバージョンが発表されてしまったのだが。

というわけで、スキルが10レベルを超えて覚える魔法や能力はないものの、レベルが上がっただけMNDの消費が下がり、魔法の威力も上がる。10レベル以上のレベルアップに必要な経験点は、かつて公式がWEBに公開していた計算式を把握していたので問題ない。

また、身体能力のパラメーターも上げることができる。これは基本ルールにも書かれている。

例えば、俺はすでにINTとMNDをブーストしてある。各パラメーターには、一定の数値になると任意のパラメーターを上げられるボーナスポイントがもらえることがあり、それを使ってスキルに応じたパラメーターを底上げしておくのは必須だった。

もちろん、経験点を使って上げることも可能だ。ただし、ひとつ上げるにも相応の経験点が必要だし、スキルを上げた方が冒険は楽になるので、そうする者は少ないが。

「案外、上げ放題というわけでもないな」

俺はキャラクターシートの文字を書いたり消したりして、熟考を重ねる。

キャラクターシートだけでは計算ができないため、手近にあった羊皮紙と鷲<sup>が</sup>ペンをひつつかみ、

できるだけ有利な必要経験点の計算を書きつける。

「すべてをつぎ込めば、魔術師レベルを19くらいまで上げられるが……」

「いっその他のスキルも、10レベルまでコンストさせて……」

「INTとMNDは、思い切りブーストかけたほうがいいよな……」

ぶつぶつとひとりごとを呟<sup>つぶや</sup>きつつ、ひとまず完成した。思ったよりも時間がかかった気がする。

〔名前〕メテオ・ブランディッシュ

〔性別〕男

〔年齢〕26(16)歳

〔種族〕人間

■パラメーター■

STR || 12 ↓ 36

DEX || 16 ↓ 36

AGI || 14 ↓ 34

INT || 18 ↓ 118

VIT || 14 ↓ 114

MND || 18 ↓ 518

■スキル■  
魔術師 Lv 9 ↓ 17  
賢者 Lv 3  
精霊使い Lv 0 ↓ 10  
神官 Lv 0 ↓ 10  
盗賊 Lv 0 ↓ 10

残り経験点 717560点

「うわあ、なんだか凄いことになっちゃったぞ」  
テーブルトークRPGプレイヤーの性(さが)だろう。キャラクターシートの書き付けをしている間は、この異常な状況についても、死別した石井先輩についても、思い悩むことがなかった。

「さてと。夢の中なんだから、魔法のひとつも使えるんだろうな。夢の中でもいいから『隕(メテオ)石(オーラ)とし』を使ってみたいもの……」

「お師匠様!!!」

どつばああああん!!!!!!!!!

「会議の時間はとくに過ぎてますよ!! なんでいらっしやらないんですか!？」

執務室のドアを蹴破らんばかりの激(げき)しさで闖(ちん)入(にゅう)してきたのは、ひとりの少女(ぢゆう)だった。

「ああもう。こんなに羊皮紙(ひょうひし)を書き散(ち)らして!!! 羊皮紙(ひょうひし)めちやくちや高いんですから、ちよつとは節約(せつやく)してください。しかもなんですか、この数字(すうじ)? 魔法陣(まほうじん)の研究(けんぎゆ)でもしていたんですか?」

呆(あ)気(け)にとられた俺(おれ)を無視(むし)して、ざくざく机(けい)の上(うへ)の羊皮紙(ひょうひし)をまとめ、整頓(せいとん)していく。

「いやその……すいません。あれ、俺(おれ)のキャラクターシートは?」

慌(あ)ててキャラクターシートとシャーペン(ぺん)を片付けようとしたのだが、現(あ)れたときと同じような唐(から)突(つ)きで消(け)えていた。

俺(おれ)を不審(ふしん)げに眺(なが)める少女(ぢゆう)。年の頃(ころ)は十五、六(じゅうご、ろく)といったところか。よく見ればかなりの美人(びじん)さんだ。色白(いろしろ)でふっくらしているが、年相応(ねんさうおう)といった感じ(かんじ)だ。あと数年(すんねん)もすれば、誰もが振り向(む)くくらい的美貌(びぼう)と体型(ていけい)を誇る(ほ)だろう。絹製(きんせい)らしき、魔術師(まじゆし)が身(み)に付けるタイプ(たいぷ)のローブ(ろーぶ)の上(うへ)からでも、俺(おれ)の目は誤魔化(ごまか)せない。

「……お師匠様(しせんさま)、どうしたんですか『俺(おれ)』だなんて。しかも目が据(据)わってますよ。商人(しょうじん)ギルドのおじさんみたいです」

少女(ぢゆう)は羊皮紙(ひょうひし)を抱(かか)えたまま、じとつとした目で俺(おれ)を見つめた。

「時間(じかん)になつても会議(かいぎ)に来(こ)られないし、お風邪(かぜ)でも引(ひ)かれましたか?」  
ぴとつ。

少女(ぢゆう)のおでこが、俺(おれ)のおでこと触(ふ)れ合う。

えっ、なにこの展開(てんがい)。おつちゃん、風邪(かぜ)どころか元氣(げんき)になっちゃうよ!!

「調子が悪いようでしたら、神官のアーティアさんにお師匠様の体調を見に来るよういっておきま  
すから。早く支度して会議室に来てください」

少女は執務室の奥にある部屋に駆け込み、何やら準備をしているようだ。

「もしかしてあいつ……。それに、アーティアっていったよな」

混乱しているはずの俺の頭が、やけに冴え渡っていることに戸惑いつつ、声をあげた。

「え、エステル!!」

「何ですか？ お師匠様？」

扉から顔だけ出して少女が答えた。

「い、いや。俺はどれくらい遅刻しちったのかなー、と思って」

「もう一時間以上ですっ。あと、本当に急に『俺』とかどうしたんですか？ イメチェンするに  
しても似合わないと思います」

「そうか……な」

「はい、似合いません」

ズパツ、と少女エステルは断じた。

「お師匠様は、のほほんと『僕』とかいって、ふらふらへろへろもけもけしているくらいがいいで  
す。『俺』とか似合わないです」

(……僕。メテオの一人称だ)

「はい、お師匠様の杖持つてきましたよ。執務室にいても、杖くらいいつも身につけておいてくだ

さい。魔術師なんですから」

そういってエステルは俺に杖を押し付けた。

押し付けられるなら、おでこのほうが嬉しかった。

「エステル!!」

「えっ。あ、はい？」

「おでこ。もっかい」

前髪を上げてアピールする俺に、エステルの容赦ない平手打ちが飛んだ。

## 2 決意

「時間を守らぬのは、生徒たちにも影響を及ぼしますぞ」

「メテオ様、いくらなんでも遅すぎやしないでしょうか？」

「たまには遅刻するくらいのほうが、愛嬌がありますわよ、ね」

数十人は着席できる無垢板の机に座っていたのは三人。

俺はドアを開けるなり、それぞれのお言葉に出迎えられたのであった。

いずれもウォルスタの魔術師ギルドの中心人物で、確か名前は……

「メテオ様？ 聞いておられますか。いったい一時間も何をされていましたか？」

「ロルトじい！ お前はオリナス!! お前はフィリアだ!! 耳!! えるふみみ!!」  
「えっ、あつ? ……あふんっ!」

俺はエルフのフィリアに正面から堂々と、ハグするように飛びかかって、その両耳を両手で優しく、かつ電光石火の速さでタッチした。いいい、色っぽい声とか出してけつかる!!

×××

「……ごめんなさいもうしません悪いと思っと思っています許してくださいお願いします」

俺は会議室にある豪華なイスではなく、よく磨かれ手入れされたフローリングの上で土下座をして、許しを請うた。

この三人は、俺が設定を作ったノンプレイヤー<sup>N</sup>キャラクター<sup>P</sup>クタ<sup>C</sup>ターだ。ひと目見るなり、感極まってこゝとに及んでしまった。フィリアには悪いことをしたとは思っているが、反省はしていない。正直、スキがあればまたやってしまうかもしれない。

エルフ女性のフィリアは、俺を見下ろすも柔らかな顔をしている。

だが、そのアーモンド型の目は一筋の情けも帯びていない。顔は笑っているものの目が毫も笑っていない。本気で怒っている。

こういうときは土下座だ。見た目は子供、心はおっさんの俺の経験と本能が、最大限の謝罪をすべしと告げたのである。

武術の達人が行う型<sup>た</sup>のごとき流麗な動作で、キング・オブ・謝罪である土下座をしたことに、フィリアを除く三人は毒気を抜かれた顔……というより、呆気にとられた表情で俺を見ている。いかん、ちよつとマゾっぽい気分になってきた。そんな趣味はないんだが。

「み、皆様すみません。メテオ様は魔法の研究に没頭<sup>ぼつとう</sup>しておられたようで疲れておいで……」

エステルが気丈<sup>きじょう</sup>にもフオローをしてくれる。

偉いぞ。さすが俺がギルド長補佐に任命しただけのことはある。

「う、うむ。メテオ殿も、日頃の疲れが溜<sup>た</sup>まっていたのじゃろう」

「度肝<sup>どぎま</sup>を抜かれましたが、メテオ様の年相応<sup>ねんさうおん</sup>な無邪気<sup>むじゃげ</sup>さを見られましたな」

ふたりがそれぞれ俺に声をかけた。ひとりは白髪白髭<sup>はくはつしろひげ</sup>白ローブといった魔法使い然とした老人——ロルトじい。ひとりは神官衣を身にまとった壮年の男性——オリナス。彼は手に魔術師の杖を持っている。

『ウォルスタ魔術師ギルドの三導師』

まさしく、俺が石井先輩と相談しながら作ったNPCに他ならない。

といつても、俺が最初にコピー用紙に書き付けた設定は——

ロルト・バステュー 人間 男 65歳

数種のオリジナルスペルを開発した名門の魔法使い。

ギルドのご意見番。白い髭<sup>ひげ</sup>。いかにも老魔術師。



くらいだった。そもそも、キャラの設定とはゲームを進めるうちに、どんどん書き足されていくものだからだ。

そんなNPCたちが生身を伴って、俺の前で感情を表して動いて喋っているのだ。抱きついて感激を表現したくなるのが人情というものだ。

不覚にも耳を触られ感じてしまった（であろう）フィリアが、怖い笑みを滲えたまま深いため息をつく。

「メテオ様もお疲れなのでしよう……」

「許してくれる？」

俺は目を潤ませてフィリアの整った、エルフのかんばせを見上げる。つつい耳に視線がいつてしまうが、そこまではフィリアも気が付かないようだ。

「……もう、やめてくださいね。エルフの耳は敏感なんですから」

敏感なのか。それはいいことを聞いた。

エステル視線が冷たい。

あいつは、どうもカンが鋭いようだ。子供キャラで押すのも限界がありそうだ。

「もうしません。それで、会議の内容というのは」

土下座を解除し、すつくと立ち上がって真剣な表情をつくり、一同を見回す。ここはギャップ押しで乗り切ろう。

「う、うむ。いつもは会議結果のみメテオ殿に報告しておりますが、此度は厄介な案件が国王から持ち上がりましてな」

白い髭をさげているロルトじい。

「期日はありますが、火急というほどのものではありません。メテオ様がお疲れのようなら、また明日にでも改めて」

と、気遣いをこめてオリナス。

「俺なら問題ないよ。大丈夫、教えて」

言ってから一人称が『僕』ではなく『俺』だったことに気がついたが、皆は取り立てて不審に感じなかったようだ。やはり、出鼻のエルフ耳もみしだきがインパクト大だったのだろう。

「国王様の例のアレですね。今度は農地に雨を降らせてほしいと令状が来ました」

「爺は、あまり国王が調子に乗って魔術師ギルドに干渉するのは如何かとは思いますが、無下にできません」とほと迷惑しとります」

（国王？ ウォルスタは、俺たちが作った自治領だったはずだが）

「《天候操作》は、この国ではメテオ様しか使えぬ魔法ですので、今回は代理を立てるわけにもいかず、会議にお呼びすることになりました。無理にとは申しませんので、ご検討ください」

ロルトじいが、申し訳ないという感じで、軽く白い頭を下げた。

俺はいつも会議に出るわけじゃないのか。好き勝手やらせてもらっているみたいだ。ありがたい。「わかった。今日はちょっと体調が思わしくないから、明日までに結論を出しておくよ。でも皆に

はいつも迷惑かけてるから、今回は俺がなんとかしたい」

俺も頭を下げると、皆がいくぶんギョッとしたふうであった。

「いやいや、メテオ殿に頭を下げられては『三導師』たる我々の立つ瀬がなくなってしまふ。ギルド長に雑事を押し付ける形で面目もない」

ロルトじい、お前いい奴だな。こんな生意気なガキにそんな接し方してくれるなんて、俺の作ったNPCとは思えない。

でも俺、さっきこんなの比じゃない頭の下げ方しているんだけど、それはスルー？

「しかし、国王も『ストームプリンガー』がいるからこそ、ギルドに無茶振りをしてくるのでしょ。まったく礼節に欠けるやり方です」

「メテオ様が『メテオプリンガー』となったら少しは収まるでしょうけど……あつ、すみません。出すぎた言葉でしたわ」

オリナスとフィリアが、困り顔を見合わせて、愚痴をこぼした。

ん？ ストームプリンガー？ メテオプリンガー？ なにその固有名詞。俺知らないぞ。

どうも俺が設定したものだけじゃないようだ。この夢……いや、夢じゃない。これはどうも現実くさい。耳の感触といい人物の個性といい、夢にしては生々しすぎる。

「あ……そうだね。じゃあ俺は、自室でちよつと休んだあとで頭使うから、もろもろはエステルに伝えておくよ。それじゃあ」

「夢じゃない……となると、俺のいた現実世界の俺はどうなっちゃったんだ？」

執務室の奥にある扉を抜け、俺は私室に入る。そこに置かれたでかいベッドに身を投げて呟いた。

俺はよくマップパーとして、テーブルトークRPGセッション中にマップを描いていた。だからというか、必要のないところもあれこれと設定を作っては屋敷などの平面図を描きまくった。

ウォルスタの魔術師ギルドも簡単な平面図を作っており、それによれば執務室の奥はメテオの個人のスペース——私室兼寝室となっている。

俺の脳内マップとほとんど変わらない間取りであることは確認できた。

「しかし、リアルな作り込みだな……」

ベッドに敷かれた上質なリンネルの肌触りを確かめる。確かに俺は設定魔ではあったが、ベッドシーツの素材までは決めていない。俺が決めていない部分については、適当なところで折り合いがつけられているようだ。

考えることはたくさんあるが、自分が本当にメテオ、魔術師メテオ・ブランディッシュだとしてら、やってみたいことはたくさんある。まずは魔法を使ってみたいじゃないか。魔術師だもの。

「……燃え上げれ。《点火》」

虚空に手を差し出し、頭に浮かんだ上位魔法語を口にする。

ぼむす！ と軽い音がして、手のひらから炎が立ちのぼり、一瞬で消える。

「おお!! 使えた!!!」

今のは魔術師として初歩の初歩で覚える《点火》という魔法だ。攻撃に使うことはほとんどなく、

暖炉や焚き火に着火するための簡単な便利魔法だ。

俺は、次々と頭に魔法を思い浮かべる。あれもこれも、どれも使える。10レベルの魔術師のみが使える超広範囲攻撃魔法である《隕石落とし》の魔法すら……え？ 《隕石落とし》使えるの!?

ということは、俺のレベルが本当に上がっているということだ。俺のキャラクターであるメオ・ブランドイッシュは、魔術師レベル9で止まっていたはず。

「げっ、あの経験点マジで使えたのか!？」

今度はキャラクターシートのことを念じてみた。

すると出てきた、醤油のシミつきキャラクターシート。俺が調子こいて取ったスキルやブーストしたパラメーターのままだ。

「しまった。これ、やり直しできないんじゃないか!？」

シャーペンと消しゴムで以前の状態に戻そうとするのだが、いくら消して書き直しても、じんわりと元のデータが浮かび上がってきて、元に戻ってしまう。

「経験点を使いきらなくてよかったけど、今度からスキルを取るときには慎重に取らないとな……くそっ、パラメーターはともかく、美しくないスキルの取り方しちまった」

いくら経験点があるうと、効率がいいとかいるんなことができるからとスキルを取りまくるのは、俺のRPG美学に反する。

魔術師なら、取ったとしても、みつつくらいのスキルで抑えておく。メインが魔術師だとしたら、サブにふたつくらいのスキルが美しい。ロールプレイもしやすいというもの。事実、俺は魔術師を

メインに賢者スキルをサブに持っていただけだ。

……もつとも、サブを3レベル上げるくらいの余裕しかなかったのだが。

「魔術師レベルが17に、賢者はそのまま。そこに精霊使いと神官と盗賊スキルを10レベルとかチートすぎるだろ……俺」

パラメーターもガチで上げたが、こちらはまだ許せる。魔法の威力や効果を上げるためのINTと、魔法の使用回数を増やすためMNDを上げている。その他も全体的に上げているのは、オーバールベリにふさわしい値だといえよう。

それよりも気になったのが、MNDを上げたことによる精神抵抗値の上昇だ。

『アヤタレウ』では、精神的なダメージや魔法などへの抵抗に、このMNDが関わってくる。

高ければ高いほど、精神的なダメージに強く、魔法抵抗が増す。今の俺のMNDは平均的な冒険者の四十倍以上だ。

「もしかして、さっきから俺が冷静に行動できているのは、このMNDのおかげか?」

パラメーターの値で己の冷静さが決まるのは少し気味が悪いけれども、上げてしまったものは仕方がない。そこは便利であると割りきっておくことにした。

「ひとまず現状把握だな。ウォルスタも、俺の知っているウォルスタとはちょっと違うようだし、なんか王国領に組み込まれているみたいだしな。三導師から聞いた情報だけだと、どうしようもない」

俺は自室からテラスに向かう。扉を開け放つと、心地よい風が全身をなでまわした。精霊使いの



十六歳の肉体の俺としては、ややローブがオカルトくさくて似合わないと思っていたのだが、私室にある姿見で確認するとなかなか悪くない。濃い紫に水色の帯というのはなかなか渋く、サッシュの明るさが気に入った。

しかし《飛翔》で飛ぶと、ローブのあちこちから風が入ってきて寒いのだ。本来の魔法設定では、《飛翔》を基本値で使うと時速六十キロくらいの速度が出るはずだ。

法定速度を無視して吹かしまくった原付くらいのスピードだが、信号も障害物もない空、しかも自分の身ひとつで飛んでいると、もっとスピードが出ていっているような気がする。

体感的には高速道路をオープンカーで飛ばしている感じだ。えらく体温を持っていかれる。

「《飛翔》の魔法を使うときは、気を付けないと風邪をひくな」

苦笑しながら、俺はテラスの手すりに腰掛けて、景色を一望する。

ウォルスタにある魔術師ギルドは、町のほぼ中心にある。

そして俺の私室は、ギルドの塔の最上階にあり、テラスからは町のほぼ半分を一望することができる。

先ほどの《飛翔》ではあまりの興奮のためよく見ていなかったが、改めて眺めてみるとなかなかいい町だ。

ちよつとした丘にはぼ真円の防壁を築き、きつちり東西南北に門を設けている。

東西南北の門からはまっすぐ石畳の道が延びており、すべてが中央で交差している。

無計画に作ったのではなく、なにもないところから、明確にどのように作っていくかを決めた町の姿だ。

の姿だ。

「これが俺たちが作った町、ウォルスタか」

俺たちのパーティが高レベルになりすぎて、そこらの魔物退治ではちよつと退屈になってきた。

そう考えた石井先輩が、高レベル冒険者———というか高レベルスキル持ちにふさわしい立場と場所を与えるために、長期にわたって『町をひとつ作る』というシナリオを作ったのだ。

俺たちは数年を費やしてさまざまな設定を作成し、それにそって『ウォルスタ』という町を作り上げた。

魔術師である俺は主に魔術師ギルド———近隣にはなかった魔法の研究と魔術師の育成、そして冒険者のために広く情報や魔法の品物などを取引するための組織———を作り上げた。

他のメンバーも、それぞれ自分のスキルに合った役割を演じ、神殿の長や盗賊ギルドの長、あるいは自警団といったものをウォルスタの町に作っていった。

いわゆる冒険とは毛色が違ったが、自分たちのキャラクターではなく、町を育てていくという楽しみに、皆大いにハマったものだ。

ただし、代わりに俺も他の皆も町の重要人物となってしまうため、おいそれと冒険に出ることができなくなってしまう。

故に、いろいろと口実を作っては、冒険———近隣で見つかったドラゴンの洞窟や湖底に沈んだ遺跡の調査———に出たものだ。

そこで得た財宝は、惜しみなく町を豊かにするために使う。高レベルキャラクターにありがちな

資産のインフレというのも、俺たちのパーティには存在しなかった。

今はちょうど昼時。市場や露店を出すことを想定した幅広の大通りは賑わっている。

俺は心に浮かんだ上位魔法語を唱える。

「見飽きることもなく眺めていよう。逃すことなくこの目で——確か。《鷹の目》」

《鷹の目》は視力拡大の魔法だ。テラスにいながらにして、俺の目はじゅうじゅうと音を立てていそうな炙り肉や、威勢のいい声をあげているであろう果物売り、そうした市場の臨場感を、サイレント映画のように俯瞰する。

「この魔法にはよくお世話になったけど、いざ実際使ってみると、声までは聞こえないから違和感すごいな……」

もちろん、他の魔法と併用して声を拾うことも可能だが、今回はそこまでして市場の声を聞きたいわけじゃない。

それよりも、いくつか確認しておかなくてはいけないことがあった。

まず、俺がどれだけの魔法を連続で使えるかということだ。

ゲームの中の俺であれば、使える魔法は《飛翔》《鷹の目》で六回ほど。

本来ならば、魔法使い系スキルの魔法は連発できるものではない。コンピュータRPGと違い、テーブルトークRPGの多くは、魔法使用について非常にシビアだ。魔法は一撃必殺であり、汎用性に富む手段ではあるが、使用回数制限がきつい。

『アーターレウ』においてもそれは同様で、魔法使いはその少ない使用回数で最大限の成果を上げ

ることが期待される。

冒険の最中であれば、魔法は決して遊びで使うことができないくらいで、ここぞというときに使われるものだ。

俺もテーブルトークRPGのセッション中は魔術師として、パーティの後衛でいつも魔法を最大限に活かせるタイミングに思いを巡らし、数度しか使えない魔法を有効に使おうと努めてきた。それが魔法使い職の醍醐味でもある。

今の俺は、魔法を使う回数にかかわるMNDをがつりブーストしている。

さらに、魔法使い系スキルはレベルが上がれば上がるほど、MNDの消費が抑えられる計算式となっている。

俺の試算によれば、まるまる一日《鷹の目》を使っても、MNDが尽きることはないだろう。「ありがたみがなくなるくらいだな。しかし、この世界でリアルな生活をする身としては都合がいい」

キャラクターシートの出現を念じる。虚空から出たそれを確認すると、確かに消費されたぶんMNDが減っている。『アーターレウ』のシステムで使われるレートで間違いないようだ。

このキャラクターシートが破れたりしたらどうなるのか。ちよつと試してみる気にはなれない。悪いことは起こっても、あまりいいことは起こらなさそうだし。

誰に見られるかわからないので、あまり頻繁に出し入れはしないほうがいいだろう。特に戦闘中



や人前では、頭の中でしつかりパラメーター消費を計算しておかないと、痛い目にあいそうだ。そして、これから一番大事な実験をしなくてはいけない。

この世界で冒険をしていく決意を固めたとはいえ、現実(?)世界のことであって気にしないわけにはいかない。

大抵、こうした状況に置かれた異世界モノの主人公はどうもできないものだが、俺には使い慣れた魔法がある。しかも、実際に人間同士で会話して物語を進めていく、汎用性が高いテーブルトークRPG世界の魔法だ。

「……まずは、あの魔法だな」

この魔法ならば、使ったところで危険はないだろう。俺は、もはや慣れた仕事で上位魔法語を呟く。

「馴染みの杖と宝。心あらば伝えておくれ。離れた地にあるこの私に。《探査》」

《探査》は、自分の持ち物がどこにあるかを調べる魔法だ。効果範囲は無限。自分が所有してよく見知ったものであれば、世界のどこにあってもその位置が直感的にわかる。

なお、魔法の対象は俺の財布だ。

ちょうど給料日前でたいした額も入っていなかった財布だが、ほとんど毎日見ており、完全に自分のものという意識がある。《探査》にはちょうどいい対象のはずだ。

しかし、魔法の効果は現れなかった。失敗したんだか成功したんだかよくわからない手応えだが、少なくとも俺には何も伝わってこない。

「ま、ここは異世界で、現実世界と地続きじゃないのはわかっていたけど……。いざダメとわかるとガツカリするな」

正直、この魔法が効果を発揮するとは思っていなかった。

よしんば効果を発揮したところで、どのみち次の魔法の実験は必須となる。

「《転移》の魔法を使うべきかどうか……だな」

《転移》は自分が一度でも訪れたことがある場所へ、一瞬で転移することができる高等魔法だ。MND消費はそこそこ多いものの、発動すればリスクもなく目的地に姿を現せる……はずだ。

「《探査》の魔法は発動失敗という感じじゃなく、何かに阻まれてる感があったんだよね……《転移》が発動しないならまだマシだけど、妙なところに飛ばされたりする可能性がなくもない気がするぞ」

俺は、子供のころにハマったテレビゲームのRPG、『ウィーロードリイ』の転移魔法を思い出す。そのゲームは、転移先の座標軸まで設定する必要がある、転移先に石壁などがあつた場合、石壁と融合して問答無用で死んでしまう。

もしかすると、この世界でも《転移》先に何か物体があつた場合……いや、そんなことを考えては、この魔法を使えなくなってしまう。

この魔法は高レベル魔法使いの命綱だ。

何か緊急事態があつたときの離脱に使うことができるし、移動に関しての大きなアドバンテージになるからだ。

(いずれは使わなくちゃいけない魔法だ)  
腹を括った。

「いしのなかにいる」という状況は恐るべきことだが、避けて通ることはできない。

「……峻巖の山河、羽すら休められぬ空海、時を知らせる砂の重さ。我が翼はいずれも妨げとならず、目を閉じて開ければもうそこに。《転移》!!」

#### 4 ワールドマスター

真っ暗だ。

《転移》の魔法は失敗したようだ。

俺が念じた転移先は、現実世界の俺の部屋。間違ってもこんな闇の空間ではない。

「光りあれ。《光明》」

魔法の明かりを空間にかけた。あいかわらず周囲は闇のままだが、俺の身体は魔法の光に照らされて見えるようになった。

身体はある。魔法は使える。息もできるようだ。ならば、再度《転移》でウォルスタに戻ることはできるだろう。

俺は安堵のため息をついた。

同時にそれは、元の世界に戻ることはできなさそうだ、という諦めのため息でもある。

「こっちに來てから、感覚的には二〜三時間ってところかな……あっちは真夜中か」

(朝、俺がいなかったら、母さん驚くだろうな)

いかんいかん。感傷的な気分になるところだった。

まずは今の状況を考えなくてはいけないターンだ。がんばれ俺のMND。

「さて、ここはどこだ。明らかに俺がいた世界でもないし、『アーターレウ』の世界でもない。まずはこの場所について調査するから」

気楽な調子で呟いた。声に出すことで落ち着くこともある。

気分が落ち込むのはよくない。

カラ元気でも元気。

社会人として俺が身につけた、人生を楽しく生きる秘訣だ。

「いや、その必要はない。俺が教えてやるさ」

突如、暗闇のどこから声がした。

「誰だ!？」

しまった。私室に杖を置いてきた。俺は内心舌打ちをした。

魔術師は魔法の発動体として主に杖を使う。ぶっちゃけこれまでの俺のように、杖がなくとも魔法は使えるのだが、魔力がずいぶん落ちるうえ、失敗も出やすくなる。

俺の杖はマジックアイテムで、魔力ボーナスが追加されるうえ、打撃武器としてもそこそこ有用

である。

INTとレベルのブーストをかけた俺にしてみれば些細な魔力量ではあるのだが、明らかな油断に身体がこわばる。

そんな俺の内心を気にする風もなく、暗闇からの声は気安く響いた。

「最後に会ってからまだそんなに経ってないだろ。俺だよ、俺」

改めて聞けば、その声には覚えがある。

というより、家族と同じくらい馴染みある声だ。

(……まさか、まさか!?)

「セ、センパイ!？」

「一週間ぶりくらいだな、杉村」

「お、落ち着かせてください。センパイ。どこにいるんですか!? 俺もうなんだか頭がいつぱい

いつぱいです」

「それは構わないが、この暗闇では話しくいいな」

上下も怪しい暗闇の足元に、いきなり畳が現れた。六畳間だ。

「俺もこの姿のほうがつくりくるな。机も出すか」

丸いフレームのメガネに和服を来た男が現れ、畳の上にあぐらをかいた。男の前にはやや大きめの長方形のちゃぶ台も現れた。和服は昔から先輩の部屋着だ。

ちゃぶ台も、石井先輩の自宅で、俺たちがテーブルトークRPGのセッションをするときに使っ

ていた見慣れたものだ。パーティがフルメンバー集まったときは、これだけだと手狭なので、もうひとつちゃぶ台を増やして使っていた。

「お前の姿は……メテオか。まあ、そのままでもいいだろ。ほら、杉村のお座布も出しておいたぞ。座つたらどうぞ」

暗闇の中にあたかも小島が浮かぶかのごとく、六畳間の居心地のよい空間ができ上がった。

間違いなく俺の座布団。長時間のセッションでは尻が痛くなるので、自分で厳選して購入し、石井先輩の家に置きっぱなしにしていた。

ちなみに京都の老舗から通販した座布団で、一万円近くした。

そんなことはどうでもいい。

「センパイ、なんですかこの世界は。俺はどうなっちゃったんですか。あとセンパイ、確かに死にましたよね? 葬式で棺桶に入っている顔も見ましたし、焼き場までついていったんですから、俺センパイが『俺が死んだら』っていつもいつてた通り、外付けハードディスクドライブは家族に中を覗かれる前に物理破壊までしちゃったんで、いまさら文句言わないでくださいよ」

「まてまて。お前は質問攻めで死者に鞭を打つつもりか。ぜんぜん落ち着いてないぞ」

石井先輩は寿司屋の湯呑みでお茶を一口啜った。俺の前にも、湯気をあげる緑茶の入ったマグカップが出されていた。

「まずは、HDDの物理破壊について礼を言おう。これで思い残すことはない」

「……センパイ、やっぱり死んじゃったんですか?」



「ああ、俺は死んだ。死んで、『アヤータレウ』の神になった」

「神に……なった？」

「ああ、順を追って話そう。楽にしてくれ」

つまり、石井先輩の話はこうだ。

先輩は交通事故で亡くなったが、気がついたら『アヤータレウ』の神のような存在になっていた。理由はよくわからない。しかし仮説としては――

「俺も、『アヤータレウ』のシステムが発売されてから延々二十年間ゲームマスターやってたからな。早く死にすぎたんで、特別に神待遇で招待されたんじゃないのか」

そんなアホな。

ともかく先輩は神的なものになったらしい。俺が異世界にトリップしたと思ったら、先輩はその世界の神様になっていたとか冗談がきつい。

「この一週間はなかなか大変だったぞ。旧約聖書の『創世記』の神だって一週間で世界をなんとかデザインしたし、神道も神世七代とかいって『七』に世界の始まりを関連付けている。あるいは七という数字には、何か世界にかかわる深い意味があるのかもな」

寿司屋の湯呑みで緑茶を一口。鰯だ鱈だと魚偏の漢字がびっしり書かれたこの湯呑みは、先輩が愛用していたものだ。その姿を見るに、まったく神という印象は湧かない。

「もともと俺の頭の中には、お前たちにも知らせていない世界設定がかなりあった。それと

『アヤータレウ』の基本的な世界設定を加えて、この世界の骨子こっしみたいなものを作った」

「作るっていうと、粘土ねんどから人形を作るみたいな感じですか？」

「説明できないな……もう観念からしてちよっと神的なものになってくる。お前が『どこにも中心がない球形』とか『黒い光』とかいう言葉が理解できて納得してくれるなら頑張がんばれるんだが」

「ちんぷんかんぷんです」

ちんぷんかんぷんなんて言葉、生まれて初めて使ったかもしれない。

「正直言うと、杉村がこの世界に来るのは想定外だったが」

「え、センパイが俺を呼んだんじゃ」

「俺はもうあちらの世界に干渉することはできない。じつのところ、何で杉村がこの世界にいるかよくわからないくらいだ。お前がこの『狭間の世界』に来ることがなければ、俺はお前に気が付かなかっただろう」

「マジすか」

「マジだ。……で、お前も死んだのか？ まさかとは思いますが、俺の後追い自殺とかじゃないよな」

石井先輩が嫌そうな顔で俺を見る。

いやいや。先輩が死んで泣きはしたけど、死のうだなんてこれっぽっちも思つてませんとも。

「何でこの世界に来たのか、俺もよくわかりません。ただ、センパイの形見でもらったダイスを落として、それが六ゾロだったんです」

「なんだそりゃ。……まあ、来てしまったものは仕方ない。お前も腹くを括くつて『アヤータレウ』に

住すむしかないな」

「できれば一度帰りたい。というか、ふたつの世界を往復できたら嬉しいんですけど。俺、死んでないから失しつ扱くいされて、本当にセンパイの後を追ったと皆から思われちゃうんで」

朝起きたら自分がいない。床には石井先輩の形見のダイスが落ちて……ああ、ぜつたい変なウワサをたてられる。それだけは回避かいしたい。

「俺だつて御免ごめんだ。せつかくHDDを壊してもらったのに、すつきりしないにもほどがある」

先輩も眉間みげんにシワを寄せる。

「だが、案外大丈夫かもしれないぞ」

「どういうことですか？」

「俺は『アヤータレウ』の世界をだいたい作つたが、お前たちのキャラクターも当然作つたはずだ。ウォルスタに皆いるんじゃないか。もうアーツィアやハム、リーズンやガルーダやマリアージュには会つたか？」

「いえ、アーツィアの名前は聞いたけど、まだ魔術師ギルドのNPCにしか会つてないすね」

「じゃあギルドのキャラクターたちは、お前にどう接していた？ 突然現れたとか、見たこともない人がいる、みたいな反応はされなかっただろ」

「ええまあ」

エステルには、『俺』の一人称を『似合いません』ってズバツと断言されたけどな。

「お前があちらの人格を持つてこちらに来る前から、メテオ・ブランドイッシュというキャラク



ターは自我を持って動いていた。それが答えた」

「……つまり、俺と入れ替わりでメテオは今、俺の身体にいるってことすか」

「あくまで仮説だ。いまごろメテオも、現実世界で魔法とか使いまくりで楽しくやっているかもしれないぞ」

「それはそれで心配なんですけど」

「パラレルワールドみたいなものがあるかもしれない。現に俺たちがここにいるんだからな」

「あ。経験点が唸るくらいあったのは、センパイからの餞別だと思っただけですが、アレも違うんですか」

「俺が経験点でお前を唸らせる趣味があると思うか？ どれくらいあったんだ」

「500万点くらいでした」

「ブフオツ!!」

石井先輩は盛大に緑茶を吹き出した。

「何だその桁外れの経験点は!? ……しかし、それだけあれば『アヤタレウ』ならば無敵キャラが作れるだろう。俺たちのロールプレイの趣味ではないが、実際に生きて生活する上では有利にはなるな」

「おかげでパラメーターを軒並みアップできました。振り直しができないみたいなので、経験点は使いきってないですけど、なんかこう、ズルしてキャラメイクしたみたいで気持ちよくないです」

「……仮説くらいは思いつく。仮にだ、現実世界で見えないキャラクターシートがあるとして、俺

たちはスキルやパラメーター向上に経験点を使わない。あるいは使えないですつと保持していた。それがこの世界では開放された……とかな」

「俺、現実世界で500万超えの経験点を積むようなことなんて、してないと思うんですけど」

「杉村は、リアル運が悪かったからな。例えば、スキルや判定の『絶対失敗』でもらえる経験点があるだろ。お前がほしい一日五回くらいミスすると一日50点。それが一年三百六十五日続けば1万8250点。それが三十六年続けば65万7000点。それと同じくらいの『完全成功』の芸術点。あとは、毎日何かしらの日常クエストをこなしたと考えれば、500万点の経験値もあながちありえない数でもない」

「……なるほど」

この人は昔から暗算が得意だ。すらすらと経験点の計算やダメージ量の計算を即座にやっけるマスターだった。あと、さらりと俺のリアルラックをデイスるあたりも先輩らしい。

「ともあれ、使える経験点が多いのは嬉しいだろ？ 俺は一般的に見ても経験点を出すのが渋いマスターだったからな」

石井先輩はニヤリと笑う。この人は、学生時代からこういう表情が、じつによく似合う。

「さて、質問はまだあるか？ 実は俺、めっちゃ忙しいんだ。神だからな」

「えっ。神様って忙しいの!？」

「ああ、今はお前と話すためにこうして生前の姿だが、本当はもつとこう……観念的な存在なんだよ、俺は。もうしばらくしたら、こうしてお前と人間みたいに話すこともできなくなると思う」



なにそれショックだ。死んだ先輩がこんなに身近にいて、あちらの世界のことを話せる唯一の存在だというのに、あまりに急じゃないか。

「泣くな、杉村。俺はもともと死んだ身だ。こうして会って話せただけでも奇跡みたいなもんだ」「だってセンパイ、俺ひとりぼっちになっちゃうじゃないですか。センパイだって……」

先輩は俺の肩を叩いて断言した。

「ここには俺たちが作ったキャラたちがいる。俺はそのキャラたちを高次の世界から見守るから、お前はそいつらをあの世界で守ってやれ」

「俺たちのキャラクターを守る……」

「ああ、お前にしかできない。頼んだぞ」

正直まだ呑み込めない。しかし、頭は進むべき道を理解していた。

それこそ、俺が《飛翔》の魔法で空を駆けていたときに決意したことじゃないか。

「センパイも……たまには助けてくださいよ。神様なんだから」

「そうしたいのは山々なんだが、俺は直接お前たちのことに手出しできないんだよ」

先輩はため息をついて語った。

「あくまでたとえ話、というか比喩じゃないと説明できないんだが……例えば俺は超々大企業の会長様みたいなもんだ。『アヤータレウ』という大会社を経営はしているが、人間ひとりのことはほぼ知覚できない」

先輩の顔が、わずかに寂しそうだった。

「会長っていうのは、上の上のことは決定するが、実行するのは部下だ。俺が直接手をくださることは多いようで少ないんだよ。だから、俺が人格をしつかり持っているうちに、杉村が来てくれて、こうして話ができるのは、本当に本当に、奇跡としか思えない」

まったく神らしくもないため息をついて、先輩はいった。

「だから、俺はできるだけ有能で、信頼できる部下に会社をまかせたい。そういうことだ」

「センパイは寂しくないんですか？」

「神様のな存在になってからは、どんどん楽しみみのピントが変わってきてな。世界を作って広げることが、今の俺にとっての一番の娯楽だ」

「根っからのゲームマスター気質だな、センパイは」

「ああ、俺のことは敬意を込めて『ワールドマスター』と呼ぶがいい」

「じゃあこのゲームは『ワールドトークRPG』とも呼びますか」

「そりゃあいい」

俺たちは顔を見合わせてニヤリと笑った。

この感じ、まさしくテーブルトークRPGのセッション中のテンポそのままだ。

「それじゃあ、俺からお前にいくつか教えておく」

先輩が湯呑みの緑茶を飲み干す。

「まず、俺はこの空間を『狭間の世界』と呼んでいる。『アヤータレウ』でもなく、俺たちがいた現実世界でもない。お前が《転移》で現実世界に帰ろうとして、ここで足止めされていることから

も、そういう推理が成り立つ」

「なんとなくそんな感じはしています。『探査』も試したけど、何かモヤが濃くて先の見えない感じは、この暗闇と似てますから」

「俺も、ここではたいしたことはできない。それと……あるいは、お前は元の世界に帰ることが可能かもしれない」

「え？」

「お前は新しく神官スキルを取ってるな？ 10レベルまで上げたら。なんとなくそう感じる」

先輩に指摘されて若干気恥ずかしい。ロールプレイに徹する上では、あまりに効率的なスキルの取り方は恥ずかしいものだからだ。

「神官スキルをカンストしてここに来たのは、ファインプレイだったかもしれない。お前は、この世界の最上位神にあたる俺を見知っている。つまり、俺の信徒になることができる。だから、俺の信者しか使えない、10レベルが必要な特殊魔法を使うことができる」

頭にひとつの呪文が浮かんできた。まだ使ったことはないが、神官が使う信仰系の魔法だ。もちろん使用レベルは最高位の10レベル。

「その魔法を使えば、もしかしたら帰ることができるかもしれない。だが、俺は保証できないから使うときは慎重に使え……急いで使わなくてもいいだろう。しばらくこの世界を堪能してからでも遅くはない」

俺は頭の中で魔法を確認した。……なんちゅうものをくれるんだ、この先輩は。

魔法をあれこれシミュレーションするが、難しい顔をするしかない。

「よく考えて使えよ」

「それでも、魔法使い職専門で二十年もテーブルトークRPGやっています。大丈夫ですよ、たぶん」

石井先輩はニヤリと笑う。やっぱりこの人はこういう表情がよく似合う。

「俺からの餞別はもうひとつある。俺にはもう使えないが、お前だったら役に立つかもしれない。キャラクターシートを出してみろ」

俺は自分のキャラクターシートを呼び出した。

すると、スキルの欄に新しく文字が浮かび上がった。

『ゲームマスターLv1』

「俺のゲームマスターレベルは10だったんだが、譲渡すると目減りするみたいだな。ないよりマシだろ。俺も『アーターレウ』の世界のゲームマスタースキルで何ができるかわからないが、お前ならうまく使ってくれると信じているぞ」

「……ありがとうございます、センパイ」

「だから泣くな……俺はもう神様だっていうのにつられて泣いちゃうじゃないか」

先輩は背を向けて、闇に姿を消す。

「さあ、もう行け。そして、俺たちの世界を頼んだぞ」

「はい、センパイもお元気で」

## 立ち読みサンプル はここまで

「ここに来るのは止めはしないが、俺も忙しい。俺に会えるとはもう期待するな。おそらく俺は、このやりとりで『成仏』<sup>じやうぶつ</sup>しそうな気がする。思い残すことは何もない。テーブルトークRPGのゲームマスターとして、俺は最高のメンバーと冒険することができた。そして、その次のステップに進める。恵まれすぎて泣けてくらあ」

「……俺も。俺も、センパイがマスターで本当によかったです。二十年間、ありがとうございます。した」

闇の向こうで、先輩がニヤリと笑った気配が伝わってきた。

「じゃあな、杉村。いや、メテオ」

「はい、行ってきます」

迷いはない。

短く別れの言葉を済ませると、俺は《<sup>テレポルト</sup>転移》の呪文を唱えた。

### 5 嘘感知の魔法（前編）

俺はメテオの私室にあるベッドの上に転移した。

マットレスよりわずかに上に現れたみたいで、ばいんと小さな俺の身体が心地よく弾む。

ファンタジー世界のものとはいえ、スプリングを使わずいぶんよさげなマットレスの入った

ベッドだ。

あちらの世界の俺の部屋にある、某大手通販サイトで買った九千八百円の安物ベッドとは大違いだ。

（あちらの世界か……）

心の中で『あちらの世界』とした自分の意識に、少し寂寥感<sup>せきりょうかん</sup>を感じる。

「そっかー、俺、この世界で生きていく決心したのかなー」

そうと決まれば、しなくちゃいけないこと、考えなくちゃいけないことは山ほどある。

『アーターレウ』とはわずかに違うこの世界の知識。

俺が使えるスキルの確認。

魔法の使い勝手。

俺に関しての人間関係と政治関係。

国王に無茶振りされている件。

目下<sup>もっか</sup>こんなところか。

最初と最後以外は、己を知るという感じだな。

魔術師の、上位魔法語の魔法が使えることがわかった。

これはもう直感みたいなものだけでも、俺は10レベルまでの魔法をほぼすべて使うことができるだろう。

まだ俺の知らない魔法の存在もあるだろうが、こころへんは俺のレベルが解決してくれると感じ